

いにしえ湖南ものがたり

まつばらたなか いせき

松原田中遺跡

物語のはじまり

松原田中遺跡の調査を開始しました。調査地周辺の山並も、緑まぶしく風にゆらいでます。古代に生きた人々も、このような景色を眺めていたのでしょうか。

さて、今回は松原田中遺跡の立地についてお話します。立地とは、どのような場所に遺跡があるのか、ということです。

家を建てるときは、安全で住みやすいところを探しますし、田んぼや畑は水回りのよさや、耕作に適した土があるかを考えます。

遺跡の立地を考えることで、当時の土地利用のようすが見えてきます。



今回の調査地

松原古墳群



周辺を山に囲まれたこの場所で、当時の人々はどのように生活していたのでしょうか。

今回の調査地周辺の山々にはたくさんの古墳がつくられています。昨年調査した松原古墳群もその一つです。古墳時代前期～終末期（約1700～1400年前）にかけて、古墳をつくり続けていたことがわかっています。

これらの山々にはさまれた平坦地、松原田中遺跡はあります。この平坦地は、湖山川の洪水などで運ばれた土砂によって、長い年月をかけて形成されたものです。

このような地形は、集落や耕作地として利用される場合があります。現在と同じようにこのあたりにも昔の家や田んぼがあったかもしれません。

ここに生活していた人々が古墳をつくったのでしょうか。そういうことを考えるとこれからの発掘調査がとても楽しみです。

周囲の山上には、昨年調査した松原古墳群をはじめ、たくさんの古墳があります。



今回の調査区と周辺の地形

鳥取西道路の

遺跡を掘る！

第15号 2010年7月

夏の夜の定番、きもだめし。その主役の一人(?)、ガイコツが暗闇から突然現れ、驚かされた方も多いでしょう。

遺跡ではお墓を調査しているとき、ガイコツはそろりそろりと姿を現します。仰向けに寝ているものや座っているものなど、墓の主がどのような姿勢で葬られたかを知ることが、当時の宗教や習慣などを知る手がかりになるのです。



ホネは語る

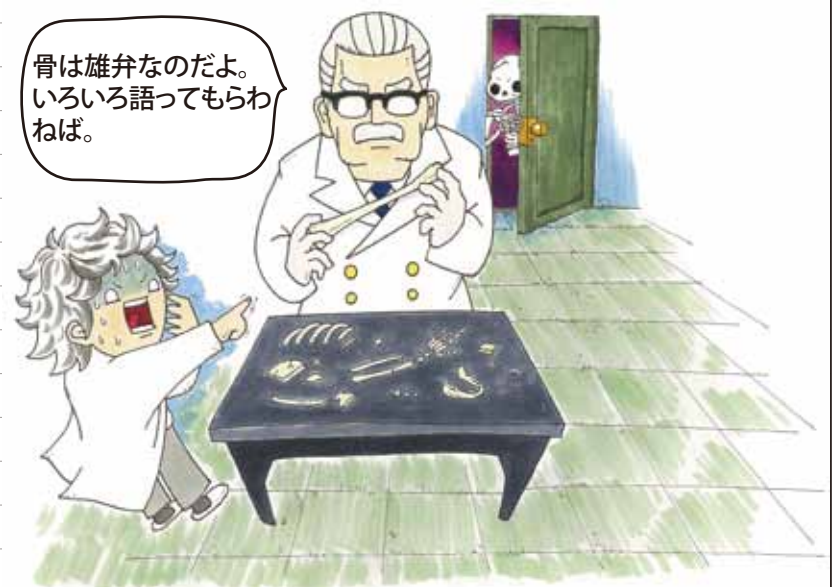
発掘調査で出土した骨は、調査事務所に持ち帰りさらに詳しく調べることにします。その分析は大学の医学部などの専門家にお願いをし、どの部分の骨なのか、年齢や性別、けがや病気の痕（あと）などを調べていきます。

頭から足の先まで、200ほどある骨のうち、男女で大きく違う骨が骨盤です。とくに女性では出産溝という傷をもつものがある、これがあるということはその女性が出産をしたことの証になります。一方、年齢をみるときにわかりやすいのが歯。やはり年をとるにつれ、歯はすり減っていきましますし、乳歯があれば子どもと判断できます。

このほか骨が変形するような病気（結核や貧血など）から、その人の健康状態がわかりますし、骨折が治った痕がある骨もあります。なかには鋭利な刃物で傷つけられた骨が見つかる場合があり、それが死因である可能性も考えられます。

自分の体の中にあるとわかっていても、普段見ることはできない骨。

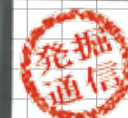
どんな形をしているのか、この夏、ガイコツを一度じっくり見てみてはいかがでしょうか？



(財) 鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所

〒680-1133
鳥取市源太 12 番地
(旧鳥取湖陵高校美和分校内)

TEL : 0857-51-7553
FAX : 0857-51-7550
メールアドレス :
matsui@pref.tottori.jp



一気に暑い夏がきましたが、夏バテしていませんか。

炎天下の中、発掘調査は進んでいますが、汗をかき、苦勞して掘りだした土器や木器を見るときは、一瞬、暑さを忘れてしまいます。日々新たな発見が続いている調査の最新情報を、ホームページに掲載していますので、是非ご覧ください！

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

埋もれた太古のくらし

もとだかゆみのき いせき

本高弓ノ木遺跡



現代人にはむずかしい？

古墳時代前期の池の中からみつけた木製構造物は、たくさんの杭や横木を組み合わせで造られています。

これらの中には、建物の柱や床板、イスの部品のようなものまで含まれています。

壊れた建物や、使わなくなった木の道具を木製構造物の材料としてリサイクルしているのでしょう。

そんな木材の調査中に、右の写真のような不思議な木片を見つけました。

細長い板の上に、直径1cmくらいの穴が等間隔で並んでいます。

穴の中は黒くコゲており、磨かれたようにつややか



何に使う道具かわかりますか？

答えは、**火をおこすための道具。**

マッチやライターのない時代、穴や切れ込みを入れた板の上で、木の棒を回転させ、火をつけていました。今回みつけたのは、下になる板の部分です。穴に入れられた棒の激しい回転による摩擦熱（まさつねつ）で、中がコゲるんですね。

棒を回転させる方法はいくつかあり、だんだん進歩してきたと考えられています。

みなさんも一度、古代の火おこしを体験してみませんか。けっこう難しいですよ。



両手で挟んでもむように回転させる「もみきり式」ももっとも原始的ですよ。



棒に絡ませた紐と、はずみ車を使って、大きな回転力を得る「まいぎり式」※昨年の現地説明会での「火おこし体験」のようす

古代の大水路 - 本高の大動脈 -

調査地南端の池からのびる古墳時代前期（約1600年前）の水路跡は、調査地北端まで約200mほど続いており、さらに北へと伸びています。

水路にたまった砂を掘っていくと、横木と組み合った杭列がみつかりました。水の流れを調整する堰（せき）のようなものと考えられます。この他にも、水路の中からは、土砂によって流された杭や板材が多くみつかりました。これらも元々は、こうした施設に使われたもので、他にも水路内でいくつか堰がつくられていたのでしょう。

この大規模な水路は、本高の平野部の水田開発に関わる重要なものと考えられ、この地域の大動脈とも言えるもののようです。



堰は、水の流れをせき止めるダムのようなもので、水位を上げ、周辺の水田に水を引きます。

池のほとりに住んだ人々

たかすみひらた いせき

高佳平田遺跡



むかしの川を探して

人力掘削を始めて約1ヶ月。

作業員さんが掘ったトレンチ（地下の状況を確認するための溝）の壁を調べることで、調査区の東側にいくつかの川が埋まっていることや、南西側で遺物が多くみつける傾向があることなど、調査区全体の様子が分かってきました。



平面的に掘り下げているようす
連日の暑さの中、スコップ両手に奮闘中！

いよいよ、次は平面的に掘り下げていくことになります。

調査区の南東側では砂が厚く堆積しているところがあって、見つかった土器から中世以降の川の跡と考えています。

周辺には洪水によるものと見られる砂の層が広がっています。

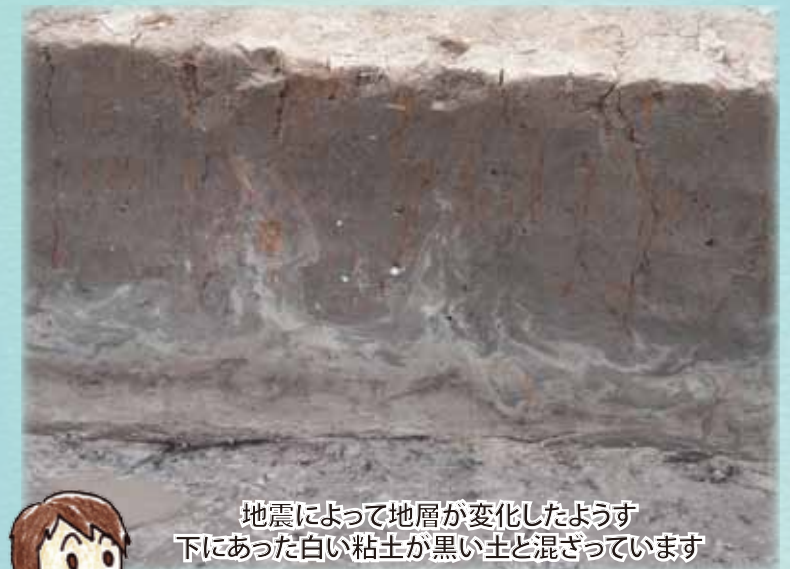
少しずつ掘り下げて、川のように周囲がどのように利用されていたのかを探っていきます。

地下に残る奇妙な模様

トレンチで地層を調べていると、地面から約60cm下で、白い粘土が黒い土の中に、まるで火が燃えているような形で入っています。これは大きな地震が起こったことでできたもののようです。

地下に水を多く含んだ柔らかい層があると、大きな地震が起こることで、上下の地層とかき混ぜるように変形することがあります。

こうした現象が起こる大きな地震は、鳥取県では中世から江戸時代にはなかったようで、おそらくは1943（昭和18）年の鳥取地震によるものと思われます。



地震によって地層が変化したようす
下にあった白い粘土が黒い土と混ざっています



自然にできたものだけど、まるで、芸術作品のようだね